

『愛と赦しにおおわれて』 ヨハネ8:1-11

- 8:1 イエスはオリブ山に行かれた。
- 8:2 朝早くまた宮にはいられると、人々が皆みもとに集まってきたので、イエスはすわって彼らを教えておられた。
- 8:3 すると、律法学者たちやパリサイ人たちが、姦淫をしている時につかまえられた女をひっぱってきて、中に立たせた上、イエスに言った、
- 8:4 「先生、この女は姦淫の場でつかまえられました。
- 8:5 モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたはどう思いますか」。
- 8:6 彼らがそう言ったのは、イエスをためして、訴える口実を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に何か書いておられた。
- 8:7 彼らが問い続けるので、イエスは身を起して彼らに言われた、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」。
- 8:8 そしてまた身をかがめて、地面に物を書きつつけられた。
- 8:9 これを聞くと、彼らは年寄から始めて、ひとりびひとり出て行き、ついに、イエスだけになり、女は中にいたまま残された。
- 8:10 そこでイエスは身を起して女に言われた、「女よ、みんなはどこにいるか。あなたを罰する者はなかったのか」。
- 8:11 女は言った、「主よ、だれもございません」。イエスは言われた、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように。」

●序論

先週の礼拝で、ある知り合いの先生からののがきで「片平先生がブツブツ言いながら作業している姿が目に見えびます」というお話をして、そんなわたしのつぶやきという罪をも神さまの愛は覆っていてくださる、とお話しました。

神さまの御言葉を聞いて、気づいていたつもりで、けれどもまた同じ過ちを繰り返して、そして気づきが与えられる。だから私にとって、愛は多くの罪を覆うという言葉は、救いでした。

わたしが知る以上に、神さまはわたしのことを知っていてくださる。

何より、そんな神さまを意識できることは幸いだと思わされた次第です。

●本論

I. 目に見えない大切な存在を意識する

さて、現代人の考え方や判断が、目に見えるもので判断する。見えるものによって強く制限されている。そして目に見えない存在についての感覚や想像力が、若干弱くなってきているのではないか…と思わされることもあります。

そう、家庭でもそのような神さまを始めとする目に見えないものを伝えるような教育というものが失われているのかもしれない。

そういう意味では、家庭で「祈る」という習慣が、その霊的感覚をつなぎとめるものとなるでしょう。

さて人は言います。神が見えたら信じる、愛が見えたら信じる…と。

それでも、『神』という存在も、そして「愛」というものも、目には見えません。でも、それは私たちにとってかけがえのないとても大切なものであることを知っているはずです。

ここで、神を知るはずの律法学者やパリサイ派の人たちが、神さま不在の議論を持ち掛けてきています。

8:5-6 モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたは どう思いますか」。彼らがそう言ったのは、イエスをためして、訴える口実を得るためであった。

彼らは信仰者と主張しながら神さまを意識していない。

はたしてわたしたちはどうだろうか、そのことを振り返ることは大切です。

Ⅱ. 自分自身の心を見る

8:4 「先生、この女は姦淫の場でつかまえられました。

8:5 モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じましたが、あなたは どう思いますか」。

8:6 彼らがそう言ったのは、イエスをためして、訴える口実を得るためであった。聖書の十戒に代表される法や戒めというのは、決して人を処罰するために与えられてものではありません。むしろ、お互いが、より快適な生活を築き上げるためにたてられた法であったのです。何より、神さまが人の幸せを望み、示されたものであると断言していいでしょう。

しかし、いつまにかその法が人を裁くためのもの、人を罰するためのものに、さま変わりしてきていたのです。その目的は、神さまの思いから遠く離れ、人を生かすものにならず、人を縛り、また処罰するためにあるかのようにになりました。

この姦淫の女性を材料に、イエス様が石打ちせよと言え、ふだん赦しと愛を説いているのになんだ！と責め立てるつもり、そして「この女を赦しなさい」と言え、律法への反逆者だと責め立てるつもりでいました。

そのところにあっただのは、その律法の主であるはずの神さまの存在は見失われ、彼らの心にあるゆがんだ憎悪だけがあっただけです。

さて、ますますヒートアップする彼らの迫り、それは彼等自身の憎悪を根っことする苛立ち。 赦すか石打ちにするか二つにひとつしか無いぞ…！とする彼等の迫り…。

そんななか、イエス様は3つ目の選択を示されたのです。

「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」。

この言葉を聞いた時、そこにいた人たちはどれほどの衝撃を受けたことでしょうか。

今、だれにも見えていない、いや見せていない。誰にも知られていないかもしれない、けれども、自分は知っている、自分の心、自分の心の罪について、イエスさまは、自分で見なおしてみよ、そしてひとつも罪を犯したことがないと言い切れるのであれば、石をとってこの女性に投げつけて良いと言われたのです。

ここで彼らは、冷静に自分の心と対話しなければなりませんでした。

結果、誰ひとりこの女性に石を投げつけるものではなく、全員がその場を立ち去って行きました。それは律法学者もファリサイ派の人たちと言われる正義を振りかざす人たちも、そこには残らなかったのです。

伝道者パウロは、人を表現して「義人はいない、ひとりもいない。」と言いました。

さらに、自らを省みて、「わたしは罪人のかしらです」と告白しています。

そこにいた人々もまた、イエスさまの言葉をもってその心が探られ、その心と対話して、他人ではなく自分の罪に気づかされたのでしょう。

わたしたちもまた、もし、いらだちや腹立ちを持った時、実はその時イエスさまのお言葉を聞くことができるチャンスではないでしょうか。

:7…イエスは身を起して彼らに言われた、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい」。

これはまた、わたしたちに冷静に自分の心と対話するようにと導き、気づくをくださる言葉なのです。

Ⅲ. 神さまの愛を見る

「神さま」そして「愛」、この両方共が大切な存在でありながら、目には見えません。でも確かに私たちを生かすものです。

2013年頃でしたか「レ・ミゼラブル」というミュージカル映画がありました。

ジャンバルジャンという一人の主人公が、愛と赦しによって変えられ、愛する者として生きる生涯を全うする感動的な物語です。そのポスターには一言こう記されていました。「愛とは、生きる力。」と。

聖書はこう語ります。

1ヨハネ4:9-10 神はそのひとり子(イエス・キリスト)を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。

ここに続くのは、すべて人を愛し、すべての人の罪を背負い、すべての人の身代わりとなって、神の子が、その十字架の死を受け入れられたということです。

私たちにそれだけの価値があるからではなく、ただ神が私たちを愛して、ひとり子を遣わされたのです。

あの姦淫の女性に対して、イエス様はまた、その心に語りかけました。

:11…イエスは言われた、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」。

、目をつぶって彼女に背を向け知らないふりをする姿があったわけではありません。

この女性に目を向け、そしてその心に触れて、彼女の罪の報いをもイエスさまはその十字架で受け取る覚悟を口にされているのです。

なぜそれほどまでに…？ わからない。それが不完全なわたしたちの経験が発する理解の限界です。しかし聖書は、それは、神が、私たちを愛しているからだと語るのです。

先ほど、「神も愛も、目に見えない」、見せて見ろという人もいます。

聖書は、はっきりとこのイエス・キリストこそあらわれた神の愛そのものであり、わたしたちを生かすものであると示すのです。

●さいごに

今日のタイトルは、『愛と赦しにおおわれて』としました。

続きをにおわせています。女性が次にどのように歩んだかを記録はありません。。

8:11 …イエスは言われた、「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」。

聖書は、その後のこの女性の応答の生涯に、それを聞く自分自身を重ねて「あなたはどのように生きていますか？」と問うていることを感じるのです。

そこにはどれだけ立派な生涯を歩む人になったか…というのではなく、どれほどキリストの愛を頼りとして、経験して生きたかの生涯を紡ぐ、それが続きです。

それはつまり、失敗する、頼りない自分を経験してなおイエスさまに頼ることがわたしたちのいのちづなとなるような生きざまです。

まさに聖書には、その愛に捉えられ、多くの経験をしながらも何度もつまり人が描かれています。

あの使徒ペテロなどは代表的です。イエスさまと共にあのゲッセマネの園で共にいる場所に身を置きながら、一緒に起きて祈り続けることができなかった。

マルコ14:41-42 三度目にきて言われた、「まだ眠っているのか、休んでいるのか。もうそれでよかろう。時がきた。見よ、人の子は罪人らの手に渡されるのだ。立て、さあ行こう。見よ。わたしを裏切る者が近づいてきた」。

わたしにとって印象深い言葉は、「もうそれでよかろう」と言われた言葉です。祈れない、つまりいていた自分のありのままをも、イエスさまはご自身の身に引き取って、十字架に歩を進められたのです。

何度も申し上げますが、わたしたちがイエスさまを知ろうとする以上に、イエスさまはわたしたちのことを、そのすべてを知っていてくださる方です。

何度も転びながらも、イエスさまにすがるわたしたちを立ち上がらせてくださり、導いてくださるお方です。

わたしは、あの女性もまたその後の生涯で「立派さ」で語られる歩みではなく、精一杯主を頼りとする者として歩いて行かれたのではないかと思っています。

「愛と赦しにおおわれて」、その中でわたしたちはこの方に応答して生き、わたしたち自身の人生を主に捧げていく経験にあずかることを大切に覚えていてください。